Latvija
日本ラトビア音楽協会ニュース
第15号
（2009年5月1日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@jcom.home.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

平成21年度日本ラトビア音楽協会総会・新春懇親会

2月11日 赤坂アークヒルズクラブに56名集う

日本ラトビア音楽協会の平成21年度（第5回）総会・新春懇親会が2月11日（水・祝）、赤坂アークヒルズクラブ（アーク森ビル37階）で開催され、会員、ゲストら56名が出席した。

12時から開かれた総会では浅妻勲会員を議長に選出、提案された①規約改正、②役員選任、③平成20年度事業報告及び会計報告、④平成21年度事業計画及び予算案の全てを満場一致で承認した。

引き続き行われた新春懇親会には新任の長内敬駐ラトビア大使、駐日ラトビア大使館からエギリス・ゼルメ次席ら3名がゲストとして参加し、親しく懇談した。ゼルメ次席が挨拶冒頭に、日本の建国記念日に鄭重な祝意を表したことが強く印象に残った。

恒例の特別演奏は、先ず男声5人組のオペラユニット「レジェンド」が見事な歌声を披露、続いてピアニストの北條陽子会員がラトビアの作曲家、ゲオルクス･ペレーツィスの作品を演奏して大きな拍手を浴びた。

総会前に開かれた理事会では、相次ぐラトビア首脳の来日や同国の経済危機が話題になった。これはラトビアだけの問題ではなく、全世界に金融・経済危機、不況の嵐が吹き荒れ、日本もかつてない困難な状況に直面している。今年5周年の節目を迎える当協会も、記念事業の見直しを余儀なくされる場面があるかもしれない。こんな時こそ、しっかり地に足を着け、会員の強固な連帯意識が必要になる。現会員数は184名で、昨年より14名の漸増。今期は初めて収支に赤字を計上したが、収入の主要部分を会員会費が占めるだけに、更に活発な事業展開を期すために、第一目標の300名を達成することが当面の急務になる。

第1部　総会

（司会：関口教和、議長：浅妻勲）

【藤井威会長挨拶】

5年目を迎えた日本ラトビア音楽協会の昨年を振り返ると、実にアクティブでポジティブな活動を続けた。音楽の面では歌と踊りの祭典に参加し、ラトビアから来日した多くの音楽家をサポートしたが、今や当協会は音楽だけの交流だけではなく、ラトビアとの親善が主要目的になった。昨年来、外務大臣、総理大臣らの要人が次々に来日し、来月には国会議長も来日されるが、我々の役割は益々大きくなってくる。会員数が184名まで増えたことは喜ばしいが、もっと急増するよう望みたい。なお、事務方を担当されている方々のご苦労に感謝したい。今年も石川(弥貴)会員が素晴らしい生け花を飾ってくださった。先ほどから美しさに惚れ込んでいる。この花の前でお話できることはとても嬉しいし、将来の明るい見通しのシンボルのような気がする。

【議決事項】

①規約改正（加藤晴生専務理事）

第4条（事業）に“ラトビア語教室の開講”“合唱団の運営”を加え、第27条（補則）に“この両事業に関してそれぞれ別に規定を定める”と改正する。

②役員の選任（同）

全員留任。顧問に板垣忠直会員が加わる。なお運営委員に、植木佐代・ラトビア語教室事務局長、堀口大樹・同講師、鈴木啓介・HPサイト管理者、高仲和子・合唱団（ラトビアの歌をうたう会＝仮称）幹事長が加わった。

③平成20年度事業報告（同）

（1）ラトビア語教室2期3期開講、ラトビア旅行の為に特別講座開講

（2）歌と踊りの祭典見学旅行（7月9日～18日）

（3）広報活動の強化

イ、Latvija発行　10号（1月10日）、11号（2月25日）、12号（6月5日）、13号（8月25日）、14号（12月5日）

ロ、HP再構築

※Latvijaバックナンバーは当協会HPで全号ご覧になれます。

（4）大使館へ中古ピアノ寄贈

（5）レセプション　新春懇親会（1月27日・新宿三井クラブ）、当協会創立4周年記念レセプション（9月15日・赤坂アークヒルズクラブ）

（6）大使館サロンコンサート　第1回（7月29日）、第2回（12月2日）

※ラトビアの歌をうたう会（仮称）が正式に発足し、1月13日から練習を開始しました。（別掲）

[音楽関係サポート]

○ギドン･クレーメルとクレメータ室内合奏団来日演奏会（東京、大阪、名古屋、東京･打ち上げ:大使館）

○ソルヴェイガ・セルガ　ピアノリサイタル（大使館）

○リガ大聖堂少年合唱団来日公園（兵庫2回、福岡、大阪、東京2回、福島、愛知）

※福岡（北九州市）は当協会の山本徳行顧問、福島（福島市）は板垣忠直顧問が主催

[大使館関係]

○旭川名誉領事館開設式典（3月13日）、大阪名誉領事館開設式典（5月16日）

○ラトビア共和国投資開発公社日本駐在員事務所開設（1月18日）

○シュレッセル運輸大臣ミッション来日（5月）

○北海道東川町が、ラトビア・ルーイヤナ町と姉妹都市協定締結（7月17日）

○JATA世界旅行博にラトビアブース開設（9月）

○リガ・神戸姉妹都市35周年リガ市使節団70名来日（11月）

○ラトビア共和国独立回復90周年記念祝賀レセプション(11月17日)

④平成20年度会計報告及び同21年度予算（遠藤守正常務理事）

（1）収入は会費収入690.000円、Latvija広告収入1.160.000円（内名刺広告160.000円）。

今期は、ラトビア旅行、新年会、創立4周年記念レセプション、大使館サロンコンサートなどでそれぞれ若干の支出があり、収支は263,850円の赤字となった。（次期繰越金233.991円）。

※当日欠席の会員で詳細資料が必要な方は事務局へ請求ください。

（2）21年度収入は会費収入700.000円、広告収入950.000円（含名刺広告）、寄付金50.000円を見込み、主要支出では5周年記念事業費1.000.000円、広報費910.000円、総務費290.000円などを計上した。

第2部　懇親会（司会：田摩勇）

大使館挨拶（エギリス・ゼルメ次席）に続き、新任の長内敬駐ラトビア大使が挨拶し、同大使の乾杯の音頭で開宴。板垣忠直新顧問、新運営委員の植木佐代ラトビア語教室事務局長、堀口大樹同講師、高仲和子ラトビアの歌をうたう会（仮称）幹事長が、それぞれ抱負を述べた。

恒例の特別演奏は、先ず若々しい男声5人組のオペラユニット「レジェンド」が初登場（この日は4人が出演）。「フニクリフニクラ」「ボラーレ」「日本に生まれてよかった（都倉俊一詞曲）」を圧倒的なボリュウムで演奏し、大喝采を浴びた。何れも国立音大出身の俊英で、デビューから3年目、レパートリーは200曲あるという。「“オペラ曲を中心に演奏し、若い人にもクラシックを楽しみながら親しんでもらいたい”というコンセプトで結成しましたが、オペラに限らず古今東西の名曲を組み合せて、笑いあり、涙ありのステージを構成しています」という。3月13日（金）に、「アクアテラス迎賓館 新横浜」で彼等のディナーショウがある。

続いてピアニストの北條陽子会員がラトビア人作曲家であるゲオルクス・ペレーツィスの「ピアノ組曲4番」から2曲演奏。「ペレーツィスはハチャトリアンの愛弟子だった。モノトーンを感じる淡々とした曲調は日本人に共通する心がある。ただ譜面にフォルテやピアノなどの記号が一切書かれてないのでとても難しい」と笑顔で話した。4月13日にペレーツィスのピアノ協奏曲を弾く（本邦初演・2月9日付け本HPニュースに詳細掲載）。

〆めの挨拶を指名された大塚清一郎顧問（元ラトビア大使）が、シンギング大使の愛称に相応しく、“ラトビアの歌をうたう会”のメンバー数名をバックに「Put Vejini（風よそよげ）」を歌った。（徳）

（関連写真を11頁に掲載）

早稲田で「歌と踊りの祭典」写真展開催

ダウゼ・ラトビア国会議長ら早稲田大学を訪問

ラトビアが誇る5年に1度のビッグイベント「歌と踊りの祭典」08年写真展が、ラトビア大使館と早稲田大学の共催（日本ラトビア音楽協会後援）で3月4日から4月9日まで、早稲田大学27号館ギャラリーで行われた。展示されたのは迫力ある大パネル写真20枚と、ゲンダルス・ダウゼ・ラトビア共和国議長、ヤーニス・ピルクス・リガ市長のメッセージ。**（HPに全写真掲載）**

折から、河野洋平衆議院議長の招聘で公式訪日していたゲンダルス・ダウゼ・ラトビア共和国国会議長ら一行7名が3月4日、早稲田大学を訪問し、11時30分から、写真展のテープカット・セレモニーに参加、多くの大学関係者や日本ラトビア音楽協会メンバーと親しく懇談した。2005年にラトビアへ演奏旅行した早稲田大学グリークラブの現役及び当時のメンバー、ラトビア大学へ留学した早大生・田島洸君、ラトビア大から早稲田へ留学中のサンドラ・ドゥンスカさんら、若い学生たちにも積極的に話しかけていた。

◇

一行は午前10時30分、大隈講堂前で内田勝一早稲田大学副総長、白樹三秀留学センター長（政経学部教授）、大高裕国際部長（理工学術院教授）ら早稲田大学首脳及び関係者の出迎えを受けた。駐日ラトビア大使館からヴァイヴァルス大使、グナ、オレグス両三等書記官、田中享同顧問及び、来週赴任予定の長内敬駐ラトビア新大使も同行した。キャンパスの案内を受けた後、大学幹部を表敬訪問し、①既存のラトビア・早稲田両大学間協定を新技術の交流をはじめとする学術提携の範囲を広げる、②短期学生交流コラボレーションの一層の促進を図る、など、具体的な学術交流の実りある話し合いを行なった。

さらにテープカット・セレモニー終了後、ホテル・リーガロイヤル東京で、白井克彦早稲田大学総長主催の歓迎会が行われた。総長は英語で、ラトビアと早稲田の深い友好関係を述べ、自分自身がグリークラブ出身であることにも触れながら、ユーモアも交えて暖かく歓迎の挨拶を行った。終始、笑顔が絶えない和気藹々の雰囲気で、あちらこちらで日本ラトビア親善の談笑が続いた。終宴に先立ち、総長から一行に記念品が贈られ、議長も総長に返礼した。

天気予報では雨が予想された為、キャンパス案内役の幕内美智子さん（国際部国際課）はエンジ色の傘を沢山抱えてきたが、天も一行の早稲田訪問に味方して曇天ながら不要に終った。

【ダウゼ議長挨拶】

白井克彦総長閣下はじめ早稲田の皆様こんにちわ。日本を公式訪問して3日目になりますが、今日は早稲田大学を訪問できてとても嬉しい。連日、日本の方々から暖かいおもてなしを受けていることにとても感激している。また、日本の多くの方々がラトビアに大変興味を持ってくださることに心から感謝したい。ラトビアでも日本への関心が急速に高まっているが、長年にわたって築かれた両国の関係を大事にしたいと念願している。日本とラトビアの交流が政治経済の面だけではなく、文化教育レベルでも盛んに行われることは本当に素晴らしい。先ほど早稲田の方々とお会いして今後の一層の協力関係を話し合った。日本とラトビアの友情は小さな部分が積み重なって発展しているが、これが極めて重要な部分だと思う。とりわけ早稲田大学とラトビア大学の深い交流は本当に重要だと考えているだけに、こうして交流が一層深まることは誠に喜ばしい。

今日から早稲田大学で「ラトビアの歌と踊りの写真展示会」が行われることになって非常にありがたく喜びで一杯。5年に1度リガで開催されるとても大規模でユニークな祭典です。歌と踊りの伝統は多くの国にもありますが、こうして5年に1度、全国の歌い手、踊り手が一堂に会する祭典はありません。ステージの上に2万～3万の歌い手が一つの合唱団になって高らかに歌います。昨年の祭典には日本ラトビア音楽協会から50名も参加されたが音楽協会のアイデアとサポートがなければ実現しなかった。心から感謝している。

最後にこの展示会を主催された早稲田大学、駐日大使館、日本ラトビア音楽協会に深く感謝したい。こうした展示会が開かれることは素晴らしいことで、今後もサポートをお願いしたい。この展示会がきっかけになって、さらに多くの方々にラトビアに関心を持っていただきたい。4年後に行われる祭典には、未だラトビアを訪問されてない方々も含め、もっと多くの人々に来てくださるよう願っています。ありがとうございました。

◇

ダウゼ議長は早稲田訪問後、皇居で天皇・皇后と謁見、一行は翌5日から広島県内、京都史跡などを視察し、7日に離日した。広島では原爆慰霊碑に顕花した。

1

2

3

4

①写真展開会式で挨拶するダウゼ議長、②写真展テープカット（左から内田早稲田大学副総長、ダウゼ議長、ヴァイヴァルス大使、③白井克彦総長と談笑（手前はマリカ夫人）、④歓迎昼食会で藤井威当協会会長に感謝状贈呈

日ラ音楽協会がダウゼ国会議長歓迎昼食会を開く

日本ラトビア音楽協会（藤井威会長）は、3月3日、綱町三井倶楽部で、3月2日に公式訪問したラトビア共和国国会議長ダングルス・ダウゼ博士夫妻一行7名の歓迎昼食会を開いた。ヴァイヴァルス大使他ラトビア大使館関係者他、長内敬駐ラトビア大使夫妻、大塚新一郎元大使（当協会顧問）夫妻、相原宏徳三菱商事元副社長、井下佳和旭川名誉領事、西原義弘前東川ラトビア協会会長、板垣忠直当協会顧問、山本徳行当協会顧問ら47名が出席し盛会だった。

【藤井会長歓迎挨拶】

「ラトビア共和国国会議長ダウゼ博士閣下、及び政府要人の方々、駐日ラトビア大使ヴァイヴァルス閣下及び大使館要人の方々、日本ラトビア音楽協会会員の方々。

日本ラトビア音楽協会を代表して、一言、歓迎の御挨拶を申し上げます。ラトビア議会議長ダウゼ閣下ほか多数のラトビア政府要人の方々が、わが国河野洋平衆議院議長の招聘により、わが国に公式訪問され、この機会に、わが協会のささやかな歓迎の宴に貴重な時間をさいて頂きましたことに、まずもって、心から御礼申し上げます。

私は、今、ダウゼ閣下ほか皆様方をお迎えしながら、1997年より3年間　駐ラトビア日本大使の任にありました時の楽しい印象をあらためて思い起こしております。

1998年7月、私は第22回歌と踊りの祭典を楽しむ幸運に恵まれました。

“花咲く娘たちがいるラトヴィアー、歌う若者たちがいるラトヴィアー、我らの愛しい祖国！”

ラトビア国歌が謳いあげるこの歌詞が、いかにこの国の真実を示しているか、私は心の底から納得したのです。

翌年、私は、古い都ツェーシスを散策していました。廃墟となったかつての騎士団の古城とそれを中心と

（次ページへ続く）

早稲田で「歌と踊りの祭典」写真展開催

（前ページより続く）
する公園の美しさ、ふるさと感覚の残る町並みのなつかしさに、時のたつのも忘れていました。そして、町外れの小さな協会の扉を開けたその時、練習中の聖歌隊の見事なハーモニーとリズム、そして、圧倒的な声量に、思わず息を呑んだのです。

これらの忘れ難い思い出の上に立って、ほぼ5年前、貴国の文化に、そして貴国の人々、社会、政治全般に深い関心を有する方々とともにこの協会を立ち上げました。

その後、当協会は貴国大使館の立ち上げ、総理、外務大臣等々、累次にわたる政府要人の訪日など、貴国とわが国との親善友好の増進を深い喜びとともに見てまいりました。そして、この度の議長閣下その他の方々の訪日に際会し、喜びこれにすぐるはありません。

時あたかも、貴国もわが国も、経済的には相当の苦境にはありますが、このような時であるからこそ、経済、社会、文化全面にわたる相互交流が望まれるのであり、皆様方の滞日が両国にとって実り多いものとなること、また、皆様方にとって楽しい思い出になることを心からお祈りして御挨拶にかえたいと思います。有難うございました」。

ダウゼ議長、藤井当協会会長らに感謝状を贈呈

この日、ダウゼ議長がラトビア共和国外務大臣に代わって藤井威当協会会長に、同国への貢献に対して感謝状を授与した。

丁度この日は日本のひな祭りということで、藤井会長夫人から陶器の内裏雛一対、加藤専務理事夫人から雛の絵の色紙を、同行者にプレゼント。議長から藤井会長に記念品と祭典のDVDが贈られた。

翌3月4日、井下佳和在旭川名誉領事、西原義弘前東川ラトビア交流協会会長にも、外務大臣からの感謝状が授与された。

【ダウゼ議長略歴】

1965年リガ市生まれ。リガ医学大学を卒業した医学博士で集中治療、麻酔の権威として知られた。医師から転進した異色の政治家で、2007年ラトビア国会議長に選出された。ラトビアに於ける社会福祉、医療行政の第一人者。ラトビア国会議長は大統領に次ぐナンバー2の地位。

ゴドマニス・ラトビア首相訪日

ゴドマニス･ラトビア首相が1月21日訪日、その日大使館での歓迎会に臨み、当協会から藤井威会長、加藤晴生専務理事が参加した。首相は体が大きく如何にも偉丈夫。それでいて目が優しい穏やかな人という印象。「残念ながら合唱経験はないが音楽は大好き。歌と踊りの祭典は我が国で一番の祭典で、日本ラトビア音楽協会から大勢来ていただいたことを感謝したい」と謝意を表した。

翌22日は15時から外人記者クラブで記者会見し、「国際金融危機におけるラトビア経済の概要」を講演した。天皇とお会いした後、18時15分から約50分、総理官邸で麻生太郎総理大臣と会談、ラトビアは厳しい経済情勢下にあるが、両国の関係を一層強化する旨、同意した。

翌23日は関西へ移動し、長浜で行われた関西日本ラトビア協会主催の歓迎会に出席、「日本は安部公房の小説とダークダックスの歌で知った」とユニークなスピーチをした。

【ゴドマニス首相略歴】

1951年、リガ市生まれ。57歳。74年ラトビア大学物理・数理学部を卒業後同大学に勤務。92年同大学物理学博士課程修了。1988年ラトビア人民戦線会派副議長に就任、1990年初代首相に就任した（93年まで）。その後ラトビア銀行協会副会長などを経て、財務大臣、内務大臣を歴任し、2007年12月20日、首相に再就任した。

※ゴドマニス首相は2月26日、金融危機の責任をとり内閣総辞職して辞任、ザトレルス大統領はドムブロフスキス元財務相（37）を次期首相に指名した。

外国人記者クラブの記者会見に
ヴァイヴァルス大使と出席

ラトヴィアの「民族精神」

黒沢 歩

20世紀の二つの大戦間の30年間期（1918年～1940年）は、初めて独立国を謳歌していたラトヴィアにおいても、ヨーロッパのロマン主義の潮流に漏れず、民族アイデンティティをめぐる動きが活発だった時代です。当時のラトヴィア人が自己に発見した（しようとした）民族精神とはなんだったのか。ここでは1920～1930年代のラトヴィアの出版物における「民族精神」に係わる記述を追いつつ、その変遷を辿ってみたいと思います。

「民族精神」

ラトヴィア憲法の発布に関連して「かつて我々を合法的に支配していた他国の主人は、民族を知らず、民族精神が欠落していた」（1921年5月2日付け政府広報誌）とし、「かつて我が小民族は、隷属させようとする何倍も強大なくびきに立ち向かう実力を持たなかった。それに精神力で抵抗してきたラトヴィア人の民族精神は、何事にも打ち克つほど強い。我が民族精神が生み出した成果は、今や大国の注目を引いている。民族古来の歌の音こそ、我らを古来の精神界へと誘い、日々失われている本来の精神を明らかにする」（1924年）とされ、「自宅において二声の歌を練習することは、広範な民衆において民族精神の練磨を促進するだけでなく、一層顕著に合唱団活動を活発にするだろう」（1927年）と農村地域での合唱が奨励されていきます。「文化的な発展を方向付けるのが民族精神だ。民族精神の歴史は民族史でもある。あらゆる民族の文化的な精神の発展が芸術、政治、産業を刺激し促進してきた」（1931年）のですが、次第に「今も議会の一部はラトヴィア人の民族精神、文化、民族の心の維持、忠誠を主張するが、それは多数派ではない。議員らは民族精神の最たる武器であるラトヴィア語を幾度となく辱めてきた」（1934年）と、政治色を帯びます。「民族の指導者は民族精神を構成する者だ」（1934年）、「芸術家は民族精神の翻訳者であり、民族文化を造る者である」（1935年）などという記述も見られます。初回の全ラトヴィア合唱祭は「初めてラトヴィア民族の意識を表面化し、アティス･クロンワルズの言う“600年の隷属の時を経て偉大で強力なラトヴィア人の民族精神は、ラトヴィア人の大地に再生しラトヴィア民族を導きはじめた”」（1938年）のです。

「民族的遺産」

民族的遺産はラトヴィアでは主に口承文芸を指し、「民族古来の遺産」とも「精神的な宝箱」とも呼ばれます。「民族覚醒期に民族的遺産が模索され、その収集が広く呼びかけられた。若者が熱心に参加した。こうして、今や我々にはダイナスを筆頭に民族的な莫大な遺産があるのだ。この豊かな遺産を自慢するだけでなく活用しなくてはならない。このような遺産を生み出した民族は、独自の世界観と伝統、そして道徳を持っていた」（1924年）、「これまでまったく光が当てられたことがなかった民族的遺産の一分野として興味深い短い逸話、もしくはラトヴィア民族の笑い話が、初めて大量（300を数える）に編纂され」（1925年）、「民族的遺産であるラトヴィアのダイナスが研究されている。ダイナスに沿って舞踏と遊びなどが作り出され」（1925年）ました。1927年に三巻目が編纂され民話と昔話集は、「ラトヴィア語でのフォークロア文学全体においても最大規模」（1925年）の編纂事業でした。そして、「ラトヴィア民族の信仰とは降って沸いたものではなく、民謡や民話などの民族的遺産に見ることのできる民族独自の道徳観の上に成り立っている。我らが神（つまり民族的遺産）は、キリスト教の神とは大きく異る」（1927年）とする民俗宗教団体も登場したのです。

「歌う民」

1930年代の出版物に「歌う民」という表現が見られるようになります。イェーカブピルスの合唱祭に際して、地元の新聞には「歌う民という呼び名を誇りに思うと同時に、地方の知識層には、合唱団は“下層階級”のためのものであり、合唱団に参加することを揶揄する見方があることは憂うべき」（1927年）とされています。それも、1938年には「ラトヴィア人は歌う民であるとされる。そのような名誉は古来からのものであり、第9回ラトヴィア合唱祭こそがその証明である」となりました。これらの記述は、後のヴィーチェ・フレイベルガ前大統領の「歌えない人にラトヴィア人はいない」という発言への系譜となったといえるでしょう。

リガ大聖堂少年合唱団4度目の来日公演（当協会後援）

合唱大国ラトビアが誇るリガ大聖堂少年合唱団が昨年（08年）11月から12月にかけて4度目の来日を果し、全国8ヶ所で公演、圧倒的好評を博した。北九州公演は山本徳行当協会顧問、福島公演は板垣忠直同顧問が主催し大成功を収めた。

音楽堂にラトビアの天使たちが舞い降りるとき

板垣　忠直

福島県芸術文化団体連合会副会長
日本ラトビア音楽協会顧問

2008年12月9日、それは福島市音楽堂が開設して以来、初めて本来の機能を発揮した一日でした。ヨーロッパの大聖堂の壮大な響きが、福島のホールに響き渡ったのです。

午後2時30分、リガ大聖堂の首席オルガン奏者、アイワール・カレイス氏が到着、早速5分程のレジスイレーションの後、試奏。その音は、このホールのオルガンを聴きなれた私も驚く素晴らしさでした。カレイス氏から「素晴らしいオルガンです…」と答えが返ってきました。

3時20分合唱団が到着、大ホールに入ったメンバーは「ウオー」と喚声をあげました。後に指揮者のクリサンス氏が「リガ大聖堂のような響きを持つホールだ…」と話しましたが、11月末に来日して初めて出会った響きだったのです。

彼等のウォーミングアップはユニークでした。それぞれ自由な姿勢、自由な場所で発声練習のパターンを低音のPPから高音へcrescしながら20分程歌い続けます。その間に、脱力、音量、音程、共鳴をチェックしているように見えました。

ホワイエには駐日ラトビア大使館から提供された12枚のラトビア共和国を紹介するポスターと、スコラカントルム福島（やながわ女声コーラス・ラトビア訪問団）が撮影した写真を展示し、大使館提供のパンフやDVDのパンフを準備して、5時30分ドアを開きました。

6時30分、スコラカントルム福島の歌うラトビア国歌に少年団も唱和し、聴衆全員が起立して、重厚な混声四部の響きで演奏会が開始されました。

プログラムの最初の曲は、ラトビアの現代作曲家プラウリンシュの「ミサ・リジェンシス」よりキリエ。初めて聴く男声のみの聖歌隊の響きは、福島市音楽堂を大聖堂に変えた瞬間です。わずか40人の合唱団と1台のオルガンが、ホールの壁を揺らし、低音が天井から舞い降り、差音が床を鳴らす…、大聖堂の響きが初めて音楽堂に響き渡りました。

第1部は宗教音楽を中心に9曲。バッハのオルガンの名曲「トッカータとフーガ」は聴き慣れた曲ですが、このホールとオルガンの素晴らしさを改めて感じさせる名演で、聴衆も息をのみ、拍手も出ない程の感動を与えました。オルガン奏者がオルガンに敬意を表した態度にも、音楽堂に関わるものとして大きな嬉しさを感じました。

聴衆の感動を呼んだ場面は沢山あります。突然二階から響いてきた13人の少年のアベマリアと、10歳の少年が歌ったサンタルチアには鳴り止まない拍手が続きました。

賛助出演の森合小学校特設合唱クラブの演奏をはさんで、第2部はモーツアルトのレクイアムで始まり、ヘンデルのハレルヤで終わりましたが、中間部で歌った4曲のラトビア民謡も聴衆の関心を呼びました。

25曲、2時間にわたる演奏会も、瞬く間に終了しました。リガ大聖堂少年合唱団は福島市音楽堂の機能を使いこなした初めての合唱団、このホールの素晴らしさ、このホールを持つ誇りを私達福島市民に与えてくれたコンサートでした。

このホールを残してくれた、故河原田市長、故高野広治氏をはじめ当時の関係者の皆さんに改めて感謝いたします。

指揮者マルティンス・クリサンス氏

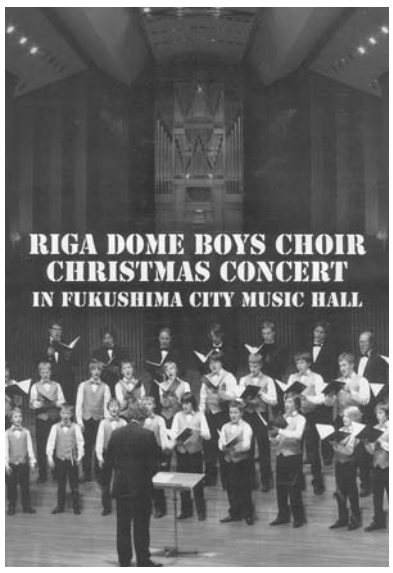
今回の日本演奏旅行は4度目ですが、故郷に帰ったような気持ちです。福島のこのホールは大変素晴らしく、リガの大聖堂で演奏しているように、気持ち良く演奏できました。日本にもこんな素晴らしいホールがあることに感動しました。毎日のようにステージが続きましたが、今日このホールで演奏できて今までの疲れが消えました。

[日本の合唱団へアドバイス]子供の頃からアカペラで練習することです。音程感も、ハーモニー感も、良くなります。お互いに聴き合い、合わせる心が大切です。

（福島市音楽堂友の会会報
第57号から転載）

唖然とする美しい響き、高い芸術性

東京カテドラル聖マリア大聖堂演奏会



待望久しいリガ大聖堂少年合唱団の東京演奏会を聴いた。それも、彼等に最も相応しい「東京カテドラル聖マリア大聖堂」で。文字通り天に届く天使のようなボーイソプラノの美しい声が、この会場でしか味わえない素晴らしい残響と共に会場を包み込み、何とも至福の2時間余だった。今でも、少年たちのあどけない表情と共に、コンサートの感動と興奮が醒めない…。超満員だった聴衆の一人ひとりが同じ気持を味わっているに違いない。

リガ大聖堂といえば巨大なパイプオルガンがあまりにも有名で、私もその荘厳な響きを直接耳にしたことがある。今回はその大聖堂の正オルガニストであるアイワールス·カレイスが一緒に来日し、カテドラルが誇る美しい音色のパイプオルガンを演奏した。少年合唱団とオルガンが一体になった音楽は、正に世界に冠たるオルガンと合唱の国·ラトビアの真髄を極めたもので、あたかもリガ大聖堂の中にいる錯覚を味わった。

今回の来日メンバーは青年部13名と少年部25名の計38名。まず開幕にア・カペラで演奏されたラトビア人作曲家、ウギス・プラウリンシュの「ミサ・リジェンヌ」の美しさと高い芸術性に度肝を抜かれた。少年時代から合唱を続けている私の最初の印象は“合唱が違う！”。これがラトビア合唱の伝統なのか。青年部の豊かな声と歌唱力でハーモニーを分厚くして芸術性を高めながら、あくまで舞台の主役は少年たち。この難曲を、前列にいるとりわけ小さい少年が無邪気な表情で歌っていることが信じられなかった。少年部だけで演奏したアベマリア二曲、とりわけ年少の14名が一段高い場所に移動して、高いピッチのユニゾンで歌ったグノーは美の極致だった。

青年部が加わったバッハ、ラフマニノフ、デュプレ、モーツアルトなどの作品でも舞台の主役はあくまで少年たち。それぞれの深い表現は到底少年の演奏とは思えなかった。モーツアルト「レクイエム」の美しいハーモニーに思わず涙ぐんでしまった。

後半には馬の足音などの擬音を入れながら得意のラトビア民謡を4曲演奏し、最後はバッハの「クリスマス・オラトリオ」に始まるクリスマス・ソングを歌うなど、この合唱団の持つ多彩なレパートリーと可能性を存分に楽しませた。アンコールで歌った日本語の「きよしこの夜」の美しさに体全体が痺れてしまった。

指揮のマルティンス・クリサンスの物静かで控え目な動きは、逆に底知れず奥の深さを感じた。文字通り合唱王国の卓越した指揮者であることを証明した。美しいテノールソロも披露した。

ラトビアではパイプオルガンと合唱が一体になった名曲が多いが、日本ではまだこの響きの素晴らしさや表現の豊かさにあまり注目されていない。各地に埃の被ったパイプオルガンも多いだけに、もっと多くの人が親しむべきだと痛感した。

客席ではラトビア語教室のメンバーや多くの会員が想像を絶した素晴らしさに酔い、合唱の国ラトビアの伝統と力を改めて実感した。大使館のグナさん、オレグスさんら、多くのラトビア人も客席にいたが、それぞれの表情に誇らしさが垣間見えた。（徳）

協会直属合唱団

「ラトビアの歌をうたう会（仮称）」始動！

昨年7月「歌と踊りの祭典」参加者の声がきっかけになって、日本ラトビア音楽協会直属の「ラトビアの歌をうたう会（仮称）」が結成され、1月13日に練習を開始。練習前から旧交を温める談笑が続いて極めてアットホームな雰囲気でスタートした。この日の音取りのキーボードはアルトの三巻道子さんが務めた。長野から参加した多賀清雄さん（早稲田グリーOB）は、「ラトビアへ行って理屈なしにラトビアの歌にほれ込んだ。8時半に終れば新幹線で帰れるので休まずに出席するつもり。間に合わない時は東京の実家に泊まる」と意欲満々だった。

混声合唱団で団員数は3月末現在約40名。練習は指揮者山脇卓也氏の指導の下に、原則として月2回、毎月第二及び第四月曜日（1月第二のみ例外）、渋谷駅東口近くのアイビスビル10Fで午後6時30分より8時30分まで。堀口大樹ラトビア語教室講師が初回からベースパートのメンバーとして加わり、懇切丁寧なラトビア語指導を続けている。会費は月額2000円。

[指揮者　山脇卓也]

早稲田大学大学院理工学研究科修士課程電子情報通信学専攻修了。指揮を故北村協一氏に師事、合唱全般において栗山文昭氏の影響を大きく受ける。卒業後、無線機器メーカーでエンジニアとして働く傍ら合唱団「お江戸コラリアーず」を指揮し各種コンクール等で活躍。全日本合唱コンクール東京大会において4年連続金賞を受賞するなど高い評価を得ている。1998年に稲門グリークラブのメンバーとして「第22回ラトビア歌と踊りの祭典」の大ステージで歌った経験を持つ。現在、合唱団「お江戸コラリアーず」、「東京稲門グリークラブ」指揮者。日本合唱指揮者協会会員。第58回東京六大学合唱連盟演奏会（5月3日・東京芸術劇場大ホール）の合同演奏で、委嘱作品の無伴奏男声合唱曲「あの日たち」（北川昇曲）を初演する。

【役員】

団　長　加藤晴生
幹事長　高仲和子
幹　事　頴原信二郎（マネジャー）、中尾憙子（会計）、遠藤守正、堀口大樹
顧　問　岡村喬生、徳田浩、松原千振、西脇久夫、堀俊輔（順不同）

4ヶ月目に入った「ラトビアの歌をうたう会（仮称）」ご報告

幹事長　高仲 和子

4曲歌えるようになりました。新しい仲間をお待ちしています！

昨年の夏に「ラトビア歌と踊りの祭典」視察旅行に参加、感動の余韻が覚めやらない頃に旅行団の加藤団長から、「ラトビアの歌をうたう合唱団」を作りたいとのお話があり、思いがけない大役をお引き受けすることになりました。

その後、会員の勧誘などの準備期間を経て、2009年1月から月2回の練習が始まりました。登録会員は男女合わせて40名ほど、毎回の練習には25名前後が出席して楽しく練習をしています。山脇卓也先生（指揮者）、堀口大樹先生（ラトビア語）という、才能溢れる二人の若い指導者が大きな魅力です。

今までの3ヶ月6回の練習で、ラトビアの曲を4曲、ラトビア語で歌えるようになりました。

♪風よそよげ
♪わが祖国に
♪ラトビア国歌
♪三つの星

※メンバーは徐々にラトビア語に慣れてきて、最近は練習のピッチが上ってきています。1回の練習で何とか新曲一曲をクリア出来そうな勢いです。4月の第1回練習ではかなりの難曲「光の城」に挑戦しました。

和気藹々に親睦会開催

3月9日の練習後に、初の親睦会を開きました。会費500円で飲み物やつまみを買って来たほかに、手づくりのお料理やお菓子を持ってきてくださった方や、ビール、チョコレートなどの差し入れをしてくださった方など、全員の気持ちが一つになり、ご馳走を囲んで乾杯！！あとは和気藹々とした雰囲気の中でいろいろな話で盛り上がりました。

手作り料理で初の親睦会（3月9日）

・ラトビアの歌を歌い、ラトビアのことを知るにつれ音楽のもたらす力を知るきっかけになった。
・一度見学のつもりで様子を見に来たけど、また歌いたくなって…。
・なかなか曲が身につかないけど、発表の場があるともっと身が入るのかしら？
・いずれラトビアの方にも聴いていただく時のために日本の歌も歌いたい。
・練習場はもう少し広いほうが、メンバーを誘いやすい。ピアノがある練習場だと、もっとレパートリーが広がるのでは？

などなど…今までお互いにあまり知らなかった名前と人柄がわかる楽しい1時間でした。

その後、毎回練習後に開いたらなどの声も聞かれるほどでしたが、お楽しみは皆さまの声と様子を見ながら、不定期に開催しようということにしました。さて次回はいつになるのでしょう？

こんな感じで誕生3ヶ月の合唱団は歩み始めました。

まだまだ、ラトビアの曲のすばらしい響きを味わうまでには行きませんが、たまに、「その響き！」と山脇先生に言っていただくと皆でニッコリしたりしています。

合唱祭参加を検討

4月13日に行われた幹事会で、この合唱団の存在・活動を多くの人に知ってもらう為に合唱祭（7月）に出場しようという話が浮上しました。メンバーの意向を聞いた上で決ることになります。この号が配布される頃は合唱団の正式名称と共に決定していることでしょう。その節はホームページに掲載します。

◇

こんな合唱団に入って一緒に歌ってみたいという方、大歓迎です。ご連絡をお待ちしています。合唱団名はまだ仮称ですが、なるべく早く相応しい団名を決めたいと願っています。

山脇指揮者（左）と堀口ラトビア語講師

練習初日（1月13日）に集ったメンバーと練習風景

【合唱団の問い合せ先】

高仲和子
〒165-0034中野区大和町2-43-6
TEL　03-3339-3139
FAX　03-3339-3159
Email　t.kaako@nifty.com

◇

【会員】（3月23日現在）順不同

◇**ソプラノ**　清水光子、桜井珊子、高仲和子、小川翠、加藤民子、山本郁子、八木昌子、中尾憙子、叟子岐子、渡辺悦子、末兼直美

◇**アルト**　三巻道子、長岡喜美子、小林雅子、中田育子、植木佐代、谷川吉美、山本友香枝、鈴木久美子、竹村洋美、羽場章子、熊谷敬子、藤井明子

◇**テノール**　多賀清雄、関口教和、加藤晴生、頴原信二郎、遠藤守正、石原祥弘、安宅望、白井猛

◇**バス**　浅妻勲、三巻義夫、西川新八郎、徳田浩、黒澤幸男、田摩勇、堀口大樹、児玉昌久

オレグスさんが審査員特別賞受賞
＝各国大使館員日本語スピーチコンテスト＝

第12回各国大使館日本語スピーチコンテスト2009が4月11日に千代田区内幸町ホールで行われ、お馴染みのラトビア共和国大使館O．オレグス三等書記官が出場して審査員特別賞を受賞した。

このコンテストは、外務省、文化庁、千代田区、NHK，ジャパンタイムスなどが後援し、同コンテスト実行委員会が主催するもので今年が12回目。この日は19カ国21名が出場した。スピーチの制限時間は5分、オレグスさんは“ボーイスカウト活動を通じた日本とラトビアの長い友情”をテーマで感動的に話した。当日の原稿を全録する。

この日の優勝者はカザフスタン共和国大使館員だった。

（8頁に写真あります）

「心に残る日本と ラトビアの友情物語」

みなさま、こんにちは。ただいま紹介していただいた、ラトビア大使館のオレグス･オルロフスと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、皆さまにお届けする話は、私の心を動かした話で、ラトビアと日本の友情の話でもあります。心に残る日本とラトビアの友情物語です。

ご存知の通り、2ヶ国の関係というのは、政府の関係だけではなく、まずは国民同士の交流が基本となっております。今回私のスピーチは日本人とラトビア人の人間同士の交流、友情につながった実際にあった話をしたいと思います。

その話の始まりは1933年のラトビアのボーイスカウト総会にさかのぼります。その年、ラトビアのスカウト運動に大変貢献した「ベリザード・ラジンシュ」というラトビア人スカウターがスカウトの最高勲章「シルバー・ウルフ」を受賞されました。スカウト運動は1917年にラトビアで広がり、1918年ラトビア独立後、盛んになりました。

しかし、第二次世界大戦が始まった頃、1940年にソ連軍はラトビアを侵略し、ラトビアのスカウト運動とスカウト組織を破壊しました。ラジンシュさんはソ連の侵略に抵抗しましたが、結果として海外に亡命せざるをえない状態になり、1949年アメリカのシアトルにたどり着き、定住しました。ラトビアから持参できたのは何よりも大切にしてきたシルバー・ウルフとほんの僅かの私物（しぶつ）だけでした。

1968年、日本からアメリカへ留学を希望する川島泰彦という日本人の若者がシアトルにやって来ました。そして、彼が大学入学のための保証人探しに苦労していた時、協力してくれたのが、ラジンシュさんでした。スカウターであったラジンシュさんと8歳からスカウトをしていた川島さんとの出会いをきっかけに新しい友情が生まれました。一期一会（いちごいちえ）と言える出会い、ラトビア人と日本人の心を永遠に結び、大きな2カ国の民族友情関係につながったのです。

ラジンシュさんは、スカウティングをはじめ、様々な分野について川島さんと語り合い、ラトビアで受賞されたシルバー・ウルフ章を見せて、スカウティングは人生で最も大事なことだと川島さんに教えたのです。日本人の若者は、大きく成長し、留学後、日本へ戻りました。1972年ラジンシュさんは日本を訪問しましたが、翌年69歳で他界しました。

その悲しいできごとを知った川島さんはすぐにシアトルのラジンシュさんの家（いえ）を訪問しました。そして、その時、ラジンシュさんの家族はラジンシュさんと川島さんのスカウティングを通した友情のあかしとして、また亡きラジンシュさんのスカウティングへの思いが込められたシルバー・ウルフを川島さんに手渡しました。

ラジンシュさんはラトビアが再び独立することを経験できませんでしたが、川島さんが彼のラトビアに対する気持ちを知り、ラトビアのスカウターにとって特別な意味を持つシルバー・ウルフを大切に保管してきました。「我が祖国ラトビアはどんなにひどい目に合っても、必ず蘇る」というラジンシュさんの言葉は実現しました。1991年にラトビアは再び独立し、スカウト運動が再建されたので、川島さんはシルバー・ウルフ章を持つべき人への返還を決意しました。スカウト運動が100周年を祝う2007年、川島さんはラトビアのスカウト組織にラジンシュさんのシルバー・ウルフ章を返還しました。この返還は川島さんとラジンシュさんの間に培（つちか）われた友好の灯火を次の日本とラトビアの世代に手渡したいという考えにもとづいて行われたことでした。

川島さんは世界スカウティングの永遠友情のあかしとして章を返還すると共に友好プロジェクトを始めました。日本とラトビアのスカウト交流はもう2年目に入っています。こういった立派な人物が日本とラトビアをつなげていくことに私が心からの敬意を払い、これからもサポートしていきたいと思います。

ご清聴（ごせいちょう）、誠にありがとうございました。

堀口大樹（ラトビア語教室講師）のラトビア報告

独立記念日の興奮、街中が国旗であふれる！国家式典に欠かせない大合唱

執筆中の修士論文のための資料集めを兼ねてラトビアに行ってきました。その際に11月18日のラトビア独立記念日を訪れる機会がありました。今年は独立90周年記念ということもあり、とりわけ盛大に祝われたようでした。独立記念日自体は1日だけですが、国内、また国外でも90周年を祝うための行事が2008年を通じて行われてきました。

リトアニアのカウナスよりバスで18日の朝にリーガに着きましたが、郊外の一軒家の軒先にはどこもラトビア国旗が掲げられており、また首都のリーガに近づいていくと、建物という建物にはラトビア国旗が揚げられ、祝日ムードが漂っていました。街をゆく人は皆、無料で配布されていた小さな国旗を片手に、いそいそと市内のいたるところで行なわれていたラトビアの歴史にまつわる映画や展覧会、コンサートに向かっていました。旧市街では人の流れが比較的一定方向で、何時からどこで記念行事が行われるのかがわかるほどでした。また多くの人が自由記念碑前で献花をし、記念撮影を行っていました。様々な花がありましたが、国旗の赤と白の色を組み合わせたブーケを手向けている人もいました。

夕方になると、自由記念碑前で夜から始まる記念式典まで時間をつぶすためか、多くの人が旧市街のカフェやレストランを埋め尽くし、時間を過ごしていました。また90周年記念のかわいらしいロゴが入ったバッジやTシャツといったグッズを街頭で販売していました。記念式典が行われる自由記念碑からまっすぐ伸びる自由通りの両側には、90周年を記念したラトビア国旗の赤白赤の街頭が設置されていました。19時に近づくと、記念式典が行われる自由記念碑を目指して、国旗とたいまつを持った人が旧市街を練り歩きました。また90周年フェスティバル「光るリーガ」の一環として、市内の公園や通りには、イリュミネーションが輝き、散歩をする人たちの目を和ませていました。

19時より記念式典が始まり、自由記念碑の両横に設置された特設舞台には計500人からなる吹奏楽団と合唱団が登場。今年の夏に行なわれた歌の祭典の合唱指揮者達も登場し、祭典時と一部同じ曲目が演奏されます。こういった国家式典にも登場してくる合唱の存在の大きさに改めて感心しました。どの曲もラトビアの自由や祖国愛をテーマにした合唱曲でした。演奏される曲を知っている人の多くは、共に口ずさみながら、お祭り気分を楽しんでいました。また、アメリカのシカゴで1961年に結成された第2次大戦時の亡命ラトビア人による音楽グループ「シカゴの5人組」もゲストとして登場。冷戦中、彼らはラトビアの外からラトビアの自由を訴えていたようです。そのためソ連時代に彼らの歌を聞くことはできなかったようですが、独立後にラトビアを定期的に訪問し、今でもラトビア人に人気があります。

20時よりヴァルディス・ザトレルス国家大統領の演説。90周年に際し、ラトビアの今後の発展を願い、そのための国民の協力を訴えました。また同時にリトアニア・エストニアからも大統領が出席、ラトビア語の通訳付きで自らの言語で演説をしていました。

21時からはダウガワ川のほとりで行なわれる花火を見るため、記念碑前にいた多くの人々がいっせいに旧市街を縦断しました。日本ほど花火を見る機会はないようで、多くの人が持っていた携帯電話で写真を撮っていました。

11月の中旬の冷え込む夜、気温は確実に0度を下回っていたと思います。それでも年齢、性別に関係なく、多くの人が2，3時間も寒さの中で90周年記念の行事を楽しんでいました。そこに住んでいる人にとっては、自由記念碑は「景色の一部」として毎日何気なく通り過ぎてしまうかもしれません。しかしこの日だけは、多くの人が歌とお祭り気分、寒さ（現地の人にはまだ寒さではないかもしれませんが）に包まれながら、自分が今ここにいれる幸せをかみ締め、なんとも言えない感慨にふけっていたことでしょう。

（8頁に写真あります）

幻のユダヤ王国ハザール

田中 享
元ラトビア駐在日本国臨時代理大使

リガにいた頃、イスラエル大使と古代のバルト海と地中海を結ぶ琥珀の道について立話をしたことがあった。同大使が突然「ところで7〜10世紀に、クリミアにハザール王国という幻のユダヤ国家があったことを知っているか？　当時、バルト海から地中海に入る交易ルートを確立していたヴァイキングが、そのユダヤ王国と交易していたんだよ」。驚く筆者に、同大使は「私が担当していた地域のことだから、決して嘘ではない」と確言した。今回は、バルト海、琥珀の道、ヴァイキング、幻のユダヤ王国についてお話してみたい。

1世紀にローマの歴史家タキトスはその著書「ゲルマニア」に、“バルト諸国の海岸で採集された琥珀が、ダウガワ河などを遡って黒海を越え、古代ギリシャ、ローマに運ばれて売られた”と記録している。古代ヨーロッパに「琥珀の道」と呼ばれた交易路を形成していたらしい。その後8〜11世紀に、スカンデイナヴィアのヴァイキングが活躍した時代に入り、ヴァイキングがリガ湾やフィンランド湾に流れ込む大河を舟で遡り、1000キロ上流にあるキエフ王国の首都ルーシを建設した。これらの舟は現在ノールウエイの博物館に実物が展示されているが、流線型の実に見事な舟である。現在私たちがロシアという言葉の語源は、このルーシであるとされる。ヨーロッパの歴史の裏には、このルートの南端で運ばれていたもう一つの隠された交易品があった。それは奴隷である。

8世紀にイスラム世界が成立すると、イスラム諸国は広く奴隷を求めた。人気があったのは骨ばったスラブ人であったといわれる。特にドニエプル川流域のスラブ人が大量に奴隷に狩りだされ、ヴァイキングが仲介運搬を請負った。クリミア半島で活躍するユダヤ人の交易人から、地中海対岸のイスラム世界に売られた。奴隷のことを「スレイブ」と呼ぶのはここに起源がある。女子供はそのまま拉致されたが男子は去勢されたという。輸出先のアラビアで宦官を「サハリバ」と呼ぶのは、このスラブという言葉に由来している。

このように、地中海沿岸のイスラム市場へスラブ民族を輸出する最大の供給地はクリミア半島にあった。とくに大きな役割を果たしたのは7世紀から10世紀の間、ドニエストル河、ヴォルガ河をはさむ広大な領地を支配した「ハザール・カガン帝国」である。この帝国は、古代イスラエル以外の歴史に登場する唯一の“幻のユダヤ王国”である。その起源の詳しいことは不明だが、本来はトルコ系遊牧民であると考えられており、ハザールとはトルコ語で遊牧民の意味らしい。紀元630年頃に勃興し、970年頃キエフ王国に滅ぼされるまで繁栄を極めたとされる。

900年前後には絶頂期を極め、版図は最大に達した。クリミア半島を中心に、ドニエプル、ドン河、ヴォルガの3つの大河の全流域、現在の南ロシア、カザフスタン、東ウクライナ、アゼルバイジャン、北コーカサス、クリミア地域まで勢力が及んだ。そして北欧・東欧との交易、地中海貿易、黒海貿易、中国との交易を股にかけた東西貿易の一大拠点として極めて大きな役割を果たした。

ハザール帝国は、その広大な支配地の中に7つの部族と7つの属国を支配したといわれる。帝国の中にはキエフなど重要な地方拠点があったが、最も繁栄を極めた拠点はクリミア半島のコッツイルだった。このハザール王国は、遊牧民が多くの被征服者を従えた多民族国家であったため、きわめて商業と宗教に対して寛容で、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教その他の宗教がそれぞれ平和裏に共存していた。

その頃、兵士の多くはイラン人のイスラム教徒で、740年頃、王と貴族がユダヤ教に改宗し、これを国教とした。あるキリスト教修道士が864年に、「フン族で自分自身をガザリと呼ぶ地にひとつの部族がある。非常に好戦的で全員がユダヤ教を信仰している」と記録を残している。ユダヤ教への改宗の理由は、王国内にヨーロッパと中国との貿易や地中海貿易に従事する強力なユダヤ人共同体が存在していたことと、キリスト教勢力とイスラム教勢力にはさまれたユダヤ教が中立を保つのに有益であったからではないかという説がある。7〜9世紀、アラビア人が領土を拡張していた時代、ハザール帝国はビザンテイウムと同盟を結んでアラビア人に対抗し、キエフを征服して、南下してきたヴァイキングとも闘ったり提携したりしたようだ。とくにヴァイキングに対して、広大な領土内で略奪を許す代わり、その半分を税として納めさせた。しかし10世紀に入るとヴァイキングの攻撃と王国内の反乱により次第に衰亡しはじめた。筆者がウイーンで親しかったユダヤ人富豪は、第二次大戦時にナチに追われてクリミアから宝石をもってイスラエル、米国へと亡命を繰り返し、最後にヨーロッパに舞い戻ったと語っていた。

ヨーロッパのアシュケナージ・ユダヤ人の主要な起源は、ハザール王国から亡命したユダヤ人が土着のユダヤ人と一緒となったのではないかとする説がある。いずれにせよハザール王国の謎はまだ解けていない。バルト諸国とロシア、ウクライナ、黒海、地中海地方との伝統的な交易の歴史は、ヨーロッパの歴史と同じ位深く長い。

祝！在ラトヴィア日本大使館開設 それでは戦前期は？

白石 仁章
外務省大臣官房外交史資料館

従来駐スウェーデン日本大使が駐ラトヴィア大使を兼任していたが（本会の藤井会長が駐スウェーデン大使を務め、駐ラトヴィア大使を兼ねておられたことを想起して頂ければわかり易いかと思います）、今年いよいよラトヴィアに日本大使館が正式に開設した。日本・ラトヴィア間の友好関係増進のために喜ばしい限りである。

ところで、筆者がこの連載を書き始めた最初の回（第6号、「ラトビア独立記念日の由来」）で若干言及したように、戦前期日本はラトヴィアに公使館を設置し、第二次世界大戦の勃発後、1940年にラトヴィアを含むバルト三国がソ連に併合されるまで同公使館は存在した。と、ここまで読まれた方の中には、国交があれば大使館や公使館をおくのは“当たり前”のことではないか、何を大げさに取り上げるのかと思われる方もおられるかもしれない。しかし、日本がラトヴィアを国家承認したのは1921年1月26日だが、リーガに公使館を開設したのはそれから8年後の1929年であった。また、いわゆるバルト三国としてラトヴィアと同時に論じられることが多いエストニアおよびリトアニアに関しては、エストニアの国家承認はラトヴィアと同時で1921年、リトアニアに対しては翌年末であったが、これら両国に対しては独立した公使館が設置されることはなく、1937年2月24日に、ようやく在ラトヴィア公使館をして在エストニア公使館および在リトアニア公使館を兼轄させることになったのであった。また、バルト三国も戦前期にはいずれの国も日本に公使館を開設していない。それゆえに、日本側がラトヴィアに公使館を設置していたことは、“当たり前なこと”ではなく、むしろ“特筆に値する”事例であるので、今回は開設にあたっての日本・ラトヴィア間に存在した重要な“利害関係の一致”について解説したいと思う。

大学で非常勤講師をしていて、学生諸君と話していると、「これも時代の流れかな」と驚かされることが多々あるが、その一つに彼らが“冷戦”を既に実感として知らないことだ。共産主義を広めようとするソ連等の動きに日本を含めて多くの国々が脅威を感じていた時代も、もはや“歴史”になりつつあるのだと思い知らされ、少し遠い目になる自分に気がつく。しかし、本会の会員の皆様にはかつての日本外交において、ソ連という存在が非常な脅威であったことは、容易に想像して頂けるのではないかと思い、少し安心して筆を進めさせて頂くこととする。日本にとっての友好国であった帝政ロシア（両国間には日露戦争も起きたが、同戦争からわずか2年後の1907年には日露協約が結ばれ、日英同盟と並んで日本外交の柱であった）が倒れ、日本の隣に社会主義を標榜する国が出来たのであるから、当時の日本側はこの国を猜疑と警戒の目で見続けた。そのため、ソ連を警戒する諸国と日本との関係は、ソ連への対抗上協力する必要が生じ、良好な関係が構築されたケースが散見される。例えば、トルコ、ポーランドなどとは、大変良好な関係を築いていた。

そして、そのような国の一つにラ

（次ページへ続く）

祝！在ラトヴィア日本大使館開設

（前ページより続く）

トヴィアもあった。帝政ロシアの時代、ロシア帝国の一部であったバルト三国は、第一次世界大戦後に独立を達成したのであったが、これら諸国の中でもラトヴィアとエストニアはソ連に対する警戒心が強かった。

余談になるが、他の二国と比して、リトアニアのみ比較的ソ連に対する警戒心が弱かった理由は二点ある。一つは、当時の地図を確認するとリトアニアのみはソ連と国境を接していなかったことが挙げられる。また、第二点としては、帝政ロシアの時代、バルト三国の諸港はロシアの重要な軍港、商港であった港が多く、ソ連にとってそれら諸港は垂涎の的であった。しかし、リトアニアのみ海岸線が極めて少なく、クライペダ（ドイツが領有権を主張し、結局1938年に割譲された）以外には港らしい港もなかったので、リトアニアは、ソ連への警戒の念が必ずしも強くなかったのであった。

これに対して、ラトヴィアとエストニアはソ連と国境を接しており、また、ラトヴィアのリーガ、リバウ、エストニアのタリンは皆良港として帝政ロシア時代に非常に重用されたので、両国はソ連に対して強い警戒心を抱き、日本と共鳴する面があったのだ。そして、ラトヴィアは地理的にも三国の中間に位置し、対ソ情報収集には最適の地と見なされ、公使館が開設され、以後ソ連通の優秀な外交官達が派遣されることとなったのであった。

日本にとって、対ソ諜報戦、すなわち当時の外交上の最大懸案において重要なパートナーであった国の一つがラトヴィアであったのである。

感 謝（加藤専務理事への礼状）

西原　義弘
前東川町日本ラトビア友好協会会長
旭川ターミナルホテル支配人

東京で久しぶりに加藤様にお会いできました。いつも、はつらつ、お元気でなによりです。ラトビアの皆様のお話をお聞きしますと、世界金融危機の荒波をもろにかぶっている国のひとつがラトビア共和国であり、国会議長が来日される直前に内閣総辞職があったとか、あるいは、数カ月前には暴動まで起きたとか、政情不安を垣間見る思いがしました。

東川町に帰ってから、ネット情報で『ラトビア　金融危機』『ラトビア　暴動』『ラトビア　内閣総辞職』などを検索すると、海外ニュースとして数多くの記述がございました。日本ラトビア音楽協会会長、藤井威様へ、ラトビア共和国外務省からの外務大臣感謝状が贈られた際、ダウゼ国会議長がご挨拶されました。「ラトビアと諸外国との交流でさまざまなパターンがあるものの、こと日本に関しては文化交流、人的交流が最も盛んな国である」と、おっしゃられたことが印象に残っております。私が1992年2月から3月にかけて取材で訪れたバルト三国は、独立直後の経済混乱期だったと思いますが、巷には旧ソ連時代のルーブル紙幣しかなく、百ドル紙幣と交換すると、しわしわの3ルーブル紙幣を幅50センチ以上の束にして二、三束ほど渡されたものです。両手をいっぱいに広げて、抱えるようにルーブル紙幣を受け取るありさまでした。

当時の文化大臣、ライモンズ・パウルズさんに経済情勢などをお聞きすると、市街地には困窮者のための『炊き出し』施設がある現実を率直に吐露されました。しかし、周辺の列強に常に支配され続けた歴史的な流れにおいても、あるいは、独立直後の困難な状況に置かれながらもラトビア語を歌い継ぎ、ラトビアの文化を守る姿勢に感動しました。博物館では小さな人形が印象に残りました。確か、『母の学校』『母の教え』というようなテーマの置物で、足元をすっぽりと隠す大きめのスカートをはいた母親が、糸車を回しながら糸をつむぎ、傍らには、床にペタッと座った子供が本を読んでいる構図です。聞けば、母親がこどもにラトビア語を教えているとのこと。

時の支配者の、たとえば旧ソ連官憲が家に捜索に入ってきても、ラトビア語の教材はスカートの中に素早く隠した、と言うエピソードでした。通訳から人形（置物）の謂れを聴いて、私が宿題にして持っていた北海タイムス社の『バルト三国展』をどのようにするか、の答えが出ました。ラトビアは『教育の国』『文化を守る国』をテーマにしようと構想が固まりました。

ラトビアでは文化大臣と言うよりも『百万本のバラ』の作曲家として世界中に知られたライモンズ・パウルズさんをはじめ、日本語夜間学校を自力で開いていたブリギッタ・クリミーニィエ校長、ラトビア大学の日本語の達人、エドガルス・カッタイ教授ら数多くの方との幸運な出会いがありました。

バルト三国の人々が手をつなぎ、旧ソ連の戦車に歌いながら立ち向かい、手をつないだ人々の鎖は国境を越え、全世界にニュースとして流されました。『人間の鎖』の写真展を東川町の写真ギャラリーで開いたことから、それをきっかけに当時、役場の課長補佐だった松岡市郎さんがラトビアの日本語夜間学校に教材を贈ろうと動き出し、東川の草の根国際交流は始まりました。松岡さんのすごいところは、ステージでは常に黒子に徹し、主役の座を町民に任せるという姿勢でした。外務省の外郭団体の国際交流補助事業や、大手企業が提案している草の根国際交流支援事業を見つけてきては、実行に移す。ほとんど全てを松岡さんが探してきました。そして、補助事業でラトビアへ出向くのは町民代表たちでした。

一度だけ、わずか四人の最初のラトビア訪問団に松岡さんが参加しましたが、そのときも、松岡さんだけは全額自費参加、他の三人には半額補助の道筋をつけております。

ラトビアとの草の根国際交流に限らず、役場職員としてさまざまな場面で、常に町民を主役にして、町民に感動、悦びを持ってもらうことに生きがいを感じる役場職員、松岡さんだからこそ、圧倒的な支持で町長に選ばれたのでもあります。

町長となって二期目の今、なおさらのように、ラトビアとの草の根国際交流には町民主役で進めたいという思いが強くなっているようです。今、初代ラトビア共和国駐日大使、ペーテリィス・ヴァイヴァルス氏のふるさと、ルーイアナ市と東川町が姉妹都市提携したことにより、交流がさらに発展しようとしております。北海道東川ラトビア交流協会も青木哲也会長のもと、新しい交流へと大きく広がろうとしております。

私は素晴らしい方たちに巡り会えたことに感謝しております。加藤様もその一人でございます。東京でのセレモニー、あるいはひんぱんに届く日本ラトビア音楽協会からの情報、これら全てがあるのは加藤様のご尽力があってのことと敬服しております。これからもどうぞ、よろしくお願いいたします。

（平成21年3月17日記）

各国大使館員スピーチコンテスト

感動的なスピーチをしたオルグスさん

見事に審査員特別賞受賞

樋口大樹ラトビア報告

建国90周年のロゴがいたるところで見られた

90周年のグッズを売る少年

自由記念碑に多くの顕花

大使館でカッタイ先生に日本語を学ぶ生徒と懇談　右端筆者、その後がカッタイ先生、左端が指揮者のアイラさん

音楽ニュース

ディーナ・ヨッフェ ピアノ演奏会

N響との共演などで日本でもお馴染みのラトビアの実力派ピアニスト、ディーナ・ヨッフェが5月に来日し、大阪、名古屋、東京、札幌でリサイタルを開く。この演奏ツアーは当日本ラトビア音楽協会が後援する。（企画・招聘：㈱プロアルテムジケ）

スケジュールは、5月12日（火）大阪・いずみホール、13日（水）名古屋・しらかわホール、14日（木）東京・日本大学カザルスホール、16日（日）札幌・札幌コンサートホールKitara（小）

【ディーナ・ヨッフェ】

旧ソ連ラトビア共和国のリガに生まれ、モスクワのチャイコフスキー音楽院にて ベラ・ゴルノスタエヴァ（伝説のピアニスト、ハインリッヒ・ネイガウス継承者の筆頭）に師事する。フランス、ドイツ、イギリス、ロシア、イスラエル、日本、アメリカ、フィンラ ンド、ポーランドなど世界各地で演奏活動を行い、またメータ指揮イスラエル・ フィル、マリナー指揮のN響、ゲルギエフ、キタエンコ指揮モスクワ・フィル、 デプリースト指揮の都響、クレーメルと共にクレメラータ・バルティカなどと協演している。精力的なソロ活動、オーケストラとの協演に加え、トゥール（フランス）、クフ モ（フィンランド）、ポルトグルアーロ（イタリア）などの室内楽フェスティバ ルへも積極的に参加し、クレーメル、バシュメット、トレチャコフ、レーピン、 ワイマン、ブルネッロなどと共演している。ドイツ、ロンドン王立音楽院でマスタークラスを開催し、また2000年以降、サ ミット音楽祭（ニューヨーク）に招かれ教授を務めている。1989年から 1996年 までテル-アヴィヴ大学（イスラエル）のルービン音楽アカデミーにて教授を務 める。1995年から2000年まで愛知県立芸術大学にて客員教授を務め、またパリ、 ニューヨーク、ハンブルク、東京などのヤマハマスタークラスにて客員教授を務 める。クリーヴランド、キエフーホロヴィッツ、高松、 Odessa-Gilelsなどの国 際コンクールにて審査員を務める。

現在は、アントン・ルービンシュタイン国際 アカデミー（Steinway House - Heinersdorff, Dusseldorf, Germany）にて教鞭をとる。多くのラジオ、テレビ出演、またレコーディングを行う。CDはショパンの「24の前奏曲」（VD-VDC-1334）、「幻想曲と19のワルツ」（CD-VICC-63）、 シューマンの「交響的練習曲とクライスレリアーナ」（AGPL-003）、シューベルト の室内楽（XCP-5026）、フランク、プロコフィエフなどがリリースされている。

今後も、ポーランド、スイス、ドイツ、日本、イスラエルなどでの演奏活動、またエルバ音楽祭（イタリア）、ビバリー・ヒルズ国際室内楽フェスティヴァル （アメリカ）、ドゥシュニキ音楽祭（ポーランド）、コンサート・イン・ニュー ヨーク（バージ・ミュージック）などへ参加の予定。

※チケットの申し込み先及び協会会員特典などは別途に案内します。

風呂本佳苗 新春ピアノリサイタル

第1回大使館サロンコンサート出演などでお馴染みのピアニスト・風呂本佳苗さんが、恒例の新春リサイタルを西宮（1月3日）、名古屋（4日）、東京（5日）で開いた。今年のプログラムのテーマは『夜を聴く』。ベートーヴェン「月光」、バルトーク「夜の音楽」、ドビュッシー「月の光が降り注ぐテラス」、山田耕筰「月光に掉さして」、ヴィートルス「月の光の下で・2つの小品」、スクリャービン「詩曲ー夜想曲」、ラヴェル「夜のガスパール」などを好演した。

【音楽の友3月号】

『夜を聴く』のタイトルで、先ずベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第14番（月光）」を弾いた。澄んだ音色である。丹念に音を積み重ねながら、巧みなデュナーミクで幻想的な雰囲気と同時に不安を内包する情熱を描き出した。続くドビユッシー（月の光が降り注ぐテラス）、バルトークの（夜の音楽）、ラヴェル（夜のガスパール）から<オンディーヌ>で憧れと透徹、不安と錯綜の同居する“夜”特有の感性を演出できたのも（月光ソナタ）で提示した奏法の効果だろう。

後半は「夜想曲」の曲想につながる小品が配置された。フォーレ「ノクターン」に続いてスクリャービン「詩曲ー夜想曲」、リスト「巡礼の年」から<ジュネーヴの鐘>、山田耕筰の<月光に棹さして>、最後にラトビア出身の作曲家、ヤーセプス・ヴィートリス（月の光の下で）「2つの小品」<眠れわが子よ><波の歌>で締めくくった。純化された響きだけでなく、異化された響きも含む選曲だが、それは波乱に翻弄される現在の世界を暗示し、聴衆の思索を誘発した。真摯で暖かい演奏がそれを可能にしたのだろう。（1月3日・兵庫県立芸術文化センターホール）　（嶋田邦雄）

※風呂本佳苗さんは4月12日、西宮市大谷記念美術館で行われたオータニミュージアムコンサートに出演、ボーン・ウィリアムス「グリーンスリーブス幻想曲」、ピーター・ウォーロック「民謡前奏曲集」、エルガー「愛の挨拶」「威風堂々第1番」などを演奏した。

ラトビア大使館でソルヴェイガ・セルガのピアノリサイタル

ラトビア期待の星で本国では抜群に人気がある女流ピアニスト、ソルヴェイガ・セルガのピアノリサイタルが10月20日夜、ラトビア大使館で行われた。大使館で開かれるピアノリサイタルは昨年のラウマ・スクリデに次ぐ二人目。

会場は国際政治の世界で話題の多い国、グルジア、ウクライナの大使やスエーデンの参事官、わが国外務省関係者ら多彩な顔ぶれ、懇親会では時折聴きなれない外国語がきこえてくるなど、いつもとはかなり雰囲気が違った20数名のしゃれたサロンコンサートだった。

プログラムは自作を含めて全てがラトビアの曲。ヤーニス・メディンシュ （ピアノのための[ダイナ集]より第6番～第10番）、ヤーニス・イヴァノフス「三つの素描曲」、ルーツィヤ・ガルータ「二つの前奏曲」、ソルヴェイガ・セルガ「ソナタファンタシァ”何処へ？”」、ヴィートルス「波の歌」。アンコールは同じくヴィートルスの「ララバィ」を演奏。澄んだ音色に時には極めてシャープにまた時には優しさが溢れる音遣いで聴衆を魅了した。**（写真11面）**

◇

ソルヴェイガ・セルガは8歳の頃からダールジンシュ音楽学校でピアノ奏法を学んだ後、ラトビア音楽アカデミーにてピアノと作曲を学ぶ。現在はラトビア文化学士院の博士課程に在籍。2000年にフランスのマリーズ・シェラン第七回国際ピアノコンクールにてディプロマを獲得。その後、ニューヨークのブリテン・オン・ザ・ベイ国際ピアノ音楽作曲コンクールにおいて幻想風ソナタ「何処へ？」で入賞し、当地で楽譜が出版された。2004年、ラトビア文化学士院より「ラトビアの国家的独自性を持つ作曲家」として高い評価を受けた。

ピアニストとしてはラトビア国内はもとよりフランス、イタリア、オーストリア、米国などの他、2005年から2007年にかけてはベルギー国内各地でコンサートを開催、06，07年は東京オペラシティリサイタルホールほかで演奏会を開催した。

2008年リガのブラックヘッドにて開催された日本紹介の写真展中に、尺八の為のソロ曲「川面の輝き」と「花びら」の2曲を作曲し発表した。2009年10月来日予定。

日本とラトビア 音の情景

ラトビアの若手チェリスト・マルチスクープライスと、日本の若手ピアニスト・村松茜、原萌葵の交流演奏会が2月27日、神奈川県二宮町、3月8日、東京で行われた（若手音楽家育成アヤメ基金主催）

前田二生、ハイドンを振る

当協会会員の指揮者・前田二生さんが3月18日、カザルスホールで行われた新東京室内オーケストラ第24回定期演奏会（ウィーン古典派の系譜）でハイドンを指揮した（歿後200年記念）。今回は「ロンドン時代のハイドン」と題して、ハイドンがロンドン訪問中に作曲した「太鼓連打」「驚愕」や、ピアノ協奏曲のハープ演奏版など貴重なプログラムも含まれた。

◇

前田氏は新東京室内オーケストラ、スロヴァキア国立ジリナ室内管弦楽団、東京レディースシンガースの常任指揮者。1989年以降ウィーン楽友協会「芸術週間コンサート」に20年連続出演するなど、国内外で大活躍を続けている。

音楽ニュース

オーケストラと男声合唱の夕べ（当協会後援）

早稲田が誇る早稲田大学交響楽団（ワセオケ）、早稲田大学グリークラブ（ワセグリ）と、ヴァイオリニスト・白井朝氏（白井克彦早稲田大学総長夫人）の2度目のコラボレーション・コンサートが5月24日に実現します。

日　時　2009年5月24日　開演19：15（開場18：30）
場　所　東京文化会館小ホール
入場券　3000円（全席自由）
曲　目　モーツアルト　ヴァイオリン協奏曲第5番、アベ ベルム コルプス他、早稲田大学グリークラブ愛唱歌集他

お問い合わせ
早稲田大学グリークラブ事務所03-3208-4100、早稲田大学交響楽団　03-3204-3585、東京文化会館チケットサービス　03-5815-5452、不動産稲門会（後援）　03-3294-2610、演奏会委員会　090-7014-0002（加藤）
※この演奏会の収益はすべて早稲田大学に寄付されます。

◇

早稲田大学交響楽団は1913年創立。学生300名によって運営され、1978年に第5回国際青少年オーケストラ大会で優勝以来、12回の海外公演で国際的にも高く評価されています。今年は4週間に及ぶ欧州演奏旅行を成功させ、トイツでは昨年完成したベルリン・フィルの「デジタル・コンサートホール」で「客演第一号」に輝き、公演はネットを通じ

第1回コラボのタベ（06年9月）

て世界中に同時中継されました。最終公演のパリ・シャンゼリゼ劇場でも、交響曲「英雄の生涯」を演奏し、超満員の聴衆から「トレビアン！」の大歓声を浴びました。

早稲田大学グリークラブは1907年創立。常に100名を超す迫力ある演奏は定評があり、国内では最も著名な男声合唱団で当協会会員にもそのOBが多く、お馴染みです。年4回のビッグ演奏会の他、数々の演奏活動を続けていますが、昨年のブラジルに続いて今年の9月には中国へ演奏旅行に出かます。

白井朝氏は東京芸術大学器楽科卒業（ヴァイオリン専攻）。幼児期から鈴木メソッドでヴァイオリンを始めました。近年の主な活動としては、ムジカーザ、日仏会館、カザルスホール、白寿ホール、教会などでのリサイタルの他、2003年からは早稲田大学交響楽団と、バッハ、メンデルスゾーン、ブルックなどの協奏曲を共演しています。

横浜市緑区合唱団がリガで「第九」演奏

横浜市緑区合唱団25名が4月23日、リガ市のラトビア人協会ホールで、「第九」演奏会を開いた。現地の国立アカデミー合唱団「Latvija」とリエバヤ交響楽団が共演した。ソロはソプラノ、アルトが日本人、テノールがラトビア人、バスがリトアニア人が歌った。会場は2006年に早稲田大学グリークラブが演奏したホールでキャパは670人。
※ラトビアでは日本のように「第九」はなかなか歌われない。

岡村喬生副会長のライフワークシューベルト「冬の旅」全曲演奏

岡村喬生当協会副会長のライフワーク「冬の旅」演奏会が今年も3月20日、東京文化会館小ホールで行われ、個性と感性が溢れ出た歌唱で絶賛を浴びた（ピアノ：イェルク・デームス）。プレトークに続いて、全24曲が一気に演奏した。

「“冬の旅”は年齢を重ねて歌うたびに世界が広がり、奥行きが深くなる。決して癒えることのない心の傷を負った若者が、自分の置き所を求め続ける旅の物語は終ることがない。私は旅の行方を探して歌い続ける…」。「音楽をすることは、自分の人生をそのまま示すこと。何をして、何を考え、どう生きるかを探り、時間を積み重ねて得たものが、舞台の上に表れる。時間が必要です。同時に、音楽が奏でられる場所、生み出された時代など、風土、歴史、文化の全てを自分の血･肉にしなければ、人を感動させる歌にはならない」。

こう語る岡村氏の「冬の旅」は、毎年聴いていても年輪を重ねる度に新しい発見があり、その世界が深まる。オペラ歌手として世界に君臨した岡村氏が、若い頃に、オペラとは正反対の音楽にライワークを発見されたことは本当に素晴らしいし、精進を重ねてこれからも歌い続けられ、先ずは3年後に卒寿・岡村先輩が歌う「冬の旅」を楽しみに、私自身も元気に生き続けねばならないと感じている。

北條陽子、G.ペレーツイス「ピアノ協奏曲」を本邦初演

4月13日に紀尾井ホールで行われた東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団“協奏曲の夕べ”で北條陽子当協会会員が、ラトビアの現代作曲家ゲオルクス・ペレーツィス（音楽アカデミー教授）の「ピアノと室内管弦楽のためのコンチェルティーノ・ビアンコ（ハ長調）」を本邦初演し、絶賛を博した（他にシューマンの協奏曲イ短調も演奏）。

北條陽子さんは武蔵野音大及び同専攻科卒。卒業早々、東京シティ・フィルと共演、日本シューマン協会公演に数多く出演するなど多彩な演奏活動を続けた。2000年から英・独に進出、06ラトビアでリサイタルを連夜開催した。昭和音楽短大講師を経て現在、聖徳大学講師。

G・ペレーツィスからメッセージ

「北條陽子さんの芸術として特徴的なのは、確かで多面的な技術の中に潜む真の普遍性であり、かつ確信に満ちた方向性の内に、幅広い音楽様式を保有していることです。音楽のイデアと形象の解読は非常に的確なものでした。疑いなく、彼女は演奏家としてのキャリアを今後成功させることでしょう」。

◇

この演奏会はラトビア大使館が後援し、ヴァイヴァルス大使は、「ラトビアで広く国民に親しまれているG.ペレーツィスの作品が、北條さんによって初演されたことは、音楽を通じた両国の文化交流、友好親善に大きな意義があった」と話した。

短信

大使館のグナさん、帰国

ラトビア大使館のグナ・レイマンドヴァ三等書記官が東京での任務を終えて帰国することになり、3月31日、大使館で送別会が行われ、EU駐日代表、欧州委員会広報部長、ウクライナ大使、リトアニア大使ら、同書記官が親しくしていた約50名が招かれた。当協会会員にもお馴染みの顔（美人）で、藤井会長、加藤専務理事ら数名が出席、風呂本佳苗氏のピアノ演奏と、渡辺ゆき氏の独唱（メゾソプラノ）をプレゼント（いずれもラトビアの曲）。最後に協会員一同で桜をデザインしたオルゴール（曲もさくら）を贈った。

8月4日、史上初の直行便が飛ぶ

念願の日本からリガ直行便がいよいよ実現する。8月4日と11日にJALのチャーターフライト、ジャンボ機が観光客を乗せて飛ぶ。観光客はリガを起点にリトアニア、エストニア、サンクトペテルスブルグを全9日間の日程で訪問する。この日を切望してリガ空港は滑走路を500メートル延長した。リトアニア、エストニアはジャンボ機が着陸出来ないのでリガがハブ空港として活用される。8月4日は政府関係者も搭乗し、ラトビアでは着陸式典が開かれる。今回の観光費用は9日間で35万円の予定。

ラトビア芸大と東京芸大が国際交流展

多様な世界の芸術文化と交流を通じて国際的な拠点づくりを目指す東京芸術大学美術学部が、ラトビア芸術大学との交流を深めるため、両大学の教員・学生の作品展示会を行った。行われたのは東京芸術大学美術館・陳列館で、4月13日から20日までの1週間。ラトビア芸大の主作品は「歌と踊りの祭典」が題材。祭典会場で雄大な合唱をバックに、制作に励む学生たちの躍動する姿がDVDで公開され、極めて興味深かった。

『EUフィルムデーズ09』でラトビア映画公開

東京国立近代美術館フィルムセンター（5月29日～6月20日・2階大ホール310名）で、EU加盟国の選りすぐり21作品が一挙上映される。毎年5月に行われる「日本・EUフレンドシップウィーク」の一環として開催されるもの。ラトビアの出品作品は「バトル・オブ・リガ」（2007年・118分）で上映日時は6月6日（土）16時。6月19日（金）15時。もちろん日本初公開。入場料は一般500円、大学生・シニア300円、小中学生100円。お問い合わせは03-5777-8600。

（あらすじ）

第一次大戦後、独立直後のラトビアに帰還した兵士マルティンスは、恋人エルザとの平凡な生活を夢見ている。だが、結婚式当日、リガは再び戦禍に明け暮れることに…。ラトビア軍が首都リガを開放した1919年11月11日の出来事を背景に描かれる壮大な歴史ドラマ。（日本語字幕付き）

ラトビア語教室第4期開講ご報告
サプライズ！ラトビア料理教室も開催

ラトビア語教室事務局
植木 佐代

昨年8月から12月までの予定でスタートしたラトビア語教室第3期は、今年の3月まで延長され、3月25日に、堀口講師から受講証が渡されました。引き続き、大使館のオレグスさんもご参加くださり、親睦会を催しました。4月から高校3年生に進級する最年少の中村健太郎さんは、受験準備のためから第4期への継続を見合わせたので、お別れ会にもなりました。

4月は1日から第4期がスタートしました。新規に、2006年9月から1年間ラトビア大学に留学経験のある田島洸さんが加わりましたので、第3期から継続のメンバーはラトビア語で自己紹介を行ないました。

第2回目の8日はスペシャル授業でした。と言いますのも、教室では、大使館の格別のご支援により、可能な限りラトビア人のゲストをお迎えし、約30分間のスピーチをして戴いて、ラトビアの歴史・文化・生活など多岐にわたる情報に触れているのですが、この日は、全部の時間を使って、大使館員のご夫人Ediiteさんによる「ラトビア料理教室」が行なわれました。献立は、酢漬けキャベツのスープ、ラトビア風ポテトサラダ、豆のベーコンたまねぎ和えの三品でした。いつもはサロンでの授業ですが、この日ばかりは大使館の厨房を使い、受講生も切ったり、炒めたりをお手伝いしながら、料理は進められました。スープのブイヨンとしては、日本製の「がらスープ」が使われていました。時間の都合でサラダは事前にご用意くださり、二品ができたところで、試食会になりましたが、ビールやワインまで添えてくださって、大変和やかなひとときを過ごしました。ラトビア料理に興味がおありの方は、ご遠慮なくラトビア語教室事務局までお問い合わせください。堀口講師の和訳を添えたEdiiteさんのレシピを差し上げます。

料理教室講師のエディテさん

大使を囲む受講生たち（4月22日）

引き続き第3回もサプライズ！実はこの日のゲストはヴァイヴァルス大使の予定でしたが、大使のご発案で、急遽当日大使館で行なわれていたニットウェア「Ameri」の展示会のディレクターGinta Amerika女史から、天然素材、天然加工のニット製品のご紹介がありました。

第4回目から、堀口氏がリトアニア大使館の催しでお知り合いになった田中謙治さんが新たに加わることになり、受講生は15名。全員が出席すると、恐縮ながら補助椅子使用をお願いするという状況になっております。このように、活気ある教室が続いていることを、大使はじめ大使館の方々が大変喜んでくださり、オレグス様が親身になって支えてくださっていることに、心からお礼申し上げます。

《事務局E-mail》
uekisayo@beige.ocn.ne.jp

協会グラフティ

総会・新年懇親会

挨拶する藤井会長

加藤専務理事、後方の生花は石川弥貴会員提供

大使館ゼルメス次席、左は通訳のオレグス氏

オペラユニットのレジェンド

北條陽子会員がピアノ演奏

大使館での催し

ゴドマニス首相歓迎会

ソルヴェイガ・セルガのピアノリサイタル

ダウゼ議長来日

早稲田訪問、大隈講堂前で出迎え受ける

大学首脳を表敬訪問

大隈侯銅像前で記念撮影

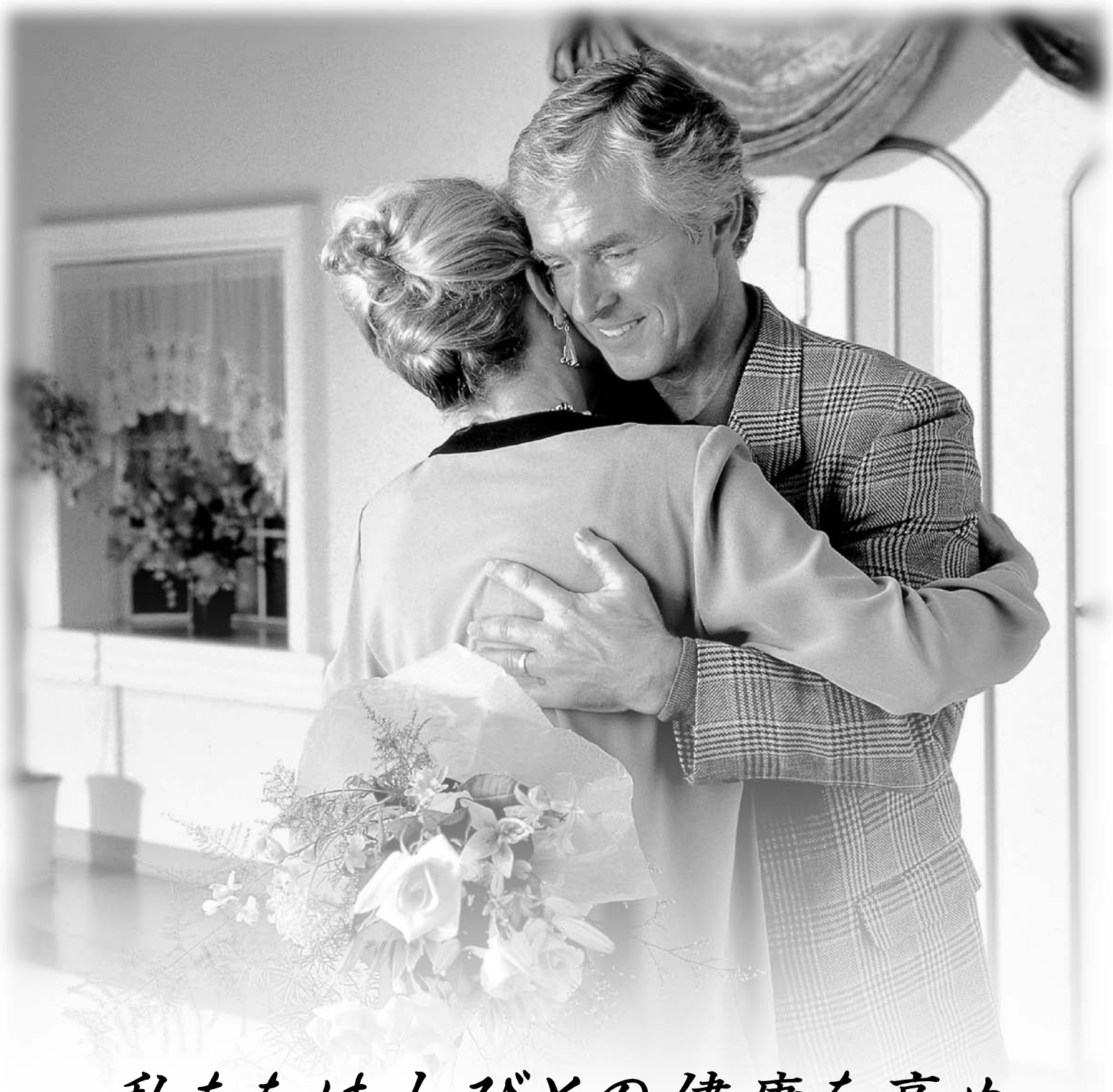
協会主催歓迎会（綱町三井倶楽部）

情報断片

♪…当協会が創設した"ラトビアの歌をうたう会"が、1月から練習を開始しました（5面詳報）。もちろん、私も欠かさず出席しています。山脇指揮者、堀口ラトビア語講師の才能豊かな二人の若者が、楽しく充実した練習を進めています。メンバーも全員燃えていますし、1年も経てば、ラトビア合唱の魅力をしっかり伝えられる日本の合唱団に成長しそうな予感がします。ラトビア語教室も第4期に入り、益々活性化してきました。協会としても、この二つの事業を大切に育てねばなりません。

♪…初の単独駐ラトビア大使として長内敬氏が赴任され、ラトビアからも首相や国会議長が来日されるなど、政治経済の面でも両国は一段と親交を深めています。8月にはいよいよリガへ直行便が飛びます。ただ、金融危機のあおりで、不況の波が押し寄せているようです。来日された首相も、帰国して間もなく内閣総辞職して退かれました。こういう時こそ、我々の音楽を通じた草の交流を一層深めるべきだと感じています。

♪…金融危機のあおりは当協会にも及び、この協会ニュースも発行頻度を減らすか、大幅なページ減を余儀なくされそうです。ホームページをもっと活用してまいりますので、どうか頻繁に目を通してくださるようお願いいたします。いろいろな写真もカラーでご覧になれます。（徳）



私たちは人びとの健康を高め

心豊かな社会づくりに貢献します

TAIHO 大鵬薬品

http://www.taiho.co.jp/

抗がん剤の研究・開発に取り組んで40年 これからもがん領域のリーディングカンパニーとして歩み続けます